

# 自由の第三パラドックス

橋本 努 北海道大学大学院経済学研究科 教授



## 1. はじめに

トランプ政権の誕生は、アメリカ社会に何をもたらしているのだろうか。不法移民の排斥、軍事費一兆円の追加、TPP離脱と恣意的な経済ナショナリズム、定例記者会見の主要メディア締め出し等々。こうした穏やかならぬ動きはいずれも、「自由の国」アメリカの理念を掘り崩しているように見える。経済的には「軍事ケインズ主義＋経済ナショナリズム」、政治的には「権威主義＋自国民優先主義」の特徴を示しているだろう。いずれも自由主義に対する反動と言わねばならない。

とりわけ、民衆の喝采的な支持を得ようとするメディア戦略は、全体主義の危険を匂わせる。ところがトランプ政権がもたらしたこの一連の社会現象は、これまでの自由論ではうまく説明することができない。自由な社会は、いったいなぜその基盤を掘り崩すことになるのか。自由のパラドックスを説明

する既存の理論は、トランプ政権の台頭メカニズムを説明しないように見える。

代表的な理論として、アイザイア・バーリンとエーリッヒ・フロムの自由論を検討してみよう。かつてバーリンは自由の概念を、「積極的自由（～への自由）」と「消極的自由（～からの自由）」の二つに分けて論じたことがある<sup>1)</sup>。「積極的自由」とは、「自己支配としての自由」であり、これには自己を律する「自律」と、集団によって集団を律する「自治」という二つの意味がある。これに対して「消極的自由」とは、「強制からの自由」であり、これには他者の干渉からの自由と、自分の内なる強制状態（抑えがたい衝動や、自由を享受する能力の不足）からの自由という二つの意味がある。バーリンによれば、この二つの自由概念のうち「積極的自由」の概念は、個人主義を否定するような「集団支配の自由」へと転化してきた。例えば、私たちの社会において、人はそれぞれ政治的に自律した生活を送るべきだ、という「積極的自由」の理想を掲げ

たでしょう。するとこの考え方は、「国家もまた自律していなければならない」という集団的な支配の要求へと、容易に転化してしまう。「自律」という積極的自由を掲げると、その理想は集団による自己統治、あるいは社会の自己制御という考え方へと転化してしまう。バーリンのみるところ、こうした自由のパラドックスが、歴史上の全体主義をもたらしたという。

けれどもトランプ政権は、かかる積極的自由のパラドックスによって生じたのではないだろう。トランプ政権は、「政府からの自由（消極的自由）」を重んじる共和党のなかから生まれた。問題は、消極的自由を重んじる共和党が、「アメリカ・ファースト」という国益重視のナショナリズムをなぜ帰結したのか、という点だ。消極的自由が国益重視に転化するというこの現象は、バーリンの説明では捉えることができない。

では、フロムによる説明はどうだろうか。バーリンとは対照的に、フロムは「消極的自由」のほうが危険だと考えた<sup>2)</sup>。フロムによれば、人々は近代化とともに、それまでの伝統や権威などの諸々の拘束から解放されて、孤独や不安にさいなまれる。すると人はかえって権威を求め、大いなるものへ帰依する心をいだくようになる。フロムによれば、全体主義とは、しだいに消極的

自由が全般化していく近代化の過程で、孤独な群衆たちが求めた政治にほかならない。消極的自由を徹底すると、全体主義の危険を招きやすいというわけである。

しかしトランプ政権は、フロムが想定するような「不安にさいなまれる孤独な群衆」から生まれたのでもない。トランプ政権の支持基盤は、既存の伝統や権威を重んじる白人旧中間層（旧エスタブリッシュメント）であった。かれらは伝統や慣習のなかに埋め込まれた存在であるという点では、決して孤独な群衆ではないだろう。フロムの説明もまた、トランプ政権誕生の背景を説明しないようにみえる。



## 2. 自由の第三パラドックス

トランプ政権誕生の背景には、集団的な勢力としては衰えはじめた「白人旧中間層」の人々が、「よき古きアメリカ」の伝統を再興しようという関心がある。よき古きアメリカ社会は、「政府からの自由（消極的自由）」のもとで、さまざまな中間団体の活動や、さまざまな伝統や慣習の実践によって支えられてきた。ところが自由な社会において、その秩序を維持する役割を担いながらも、しだいに集団として衰退していく

人たちがいる。するとかれらは自分たちの集団的勢力を挽回するという関心から、「消極的自由」それ自体を敵対視するようになるのではないか。劣位に立たされた集団は、ルサンチマン的・反動的な感情によって、自らが拠って立つ理念を否定するのではないか。そのような感情の動きが、ランプ政権の背景にあるように見える。これはバーリンやフロムが指摘するパラドックスとは別種のものであろう。

フリードリヒ・ハイエクにしたがえば、自由な社会の基礎には、人々が暗黙に共有している慣習がなければならない<sup>3)</sup>。自由は、それが人々の慣習のなかに埋め込まれていなければ、社会の秩序を維持できない。けれども自由社会の基礎にある慣習や伝統を担う人たちが人口の減少などによって政治的劣位に立たされるとき、その伝統や慣習は、反自由主義的な内容へと転化してしまう。かえって経済ナショナリズムの要求と結びついてしまう。これはアトミズム的な消極的自由の危険性ではなく、伝統や慣習に埋め込まれた消極的自由がもたらす別種のパラドックスではないだろうか。私はこれを「自由の第三パラドックス」と呼んでみたい。自由の第三パラドックスとは、自由を保守する伝統や慣習が、反自由主義的な道徳へ転化するという逆説である。

なぜこのような現象が生じるのだろうか。一つの要因は次のようなものであろう。自由社会の基礎としての伝統や慣習を担う人たちは、社会層の視点から見た場合に、必ずしも政治経済的に優位に立つわけではない。また人口の再生産において優位に立つわけでもない。自由な社会とは、一方において伝統や慣習に支えられていなければならないが、他方においては、社会発展のための動因をあわせ持たねばならない。しかし伝統・慣習の担い手と社会発展の担い手が階層的に分裂するとき、伝統・慣習を重んじる社会層はもう一方の社会層を敵視し、自らの役割を「権威」として打ちたてようとするのではないか。するとその内容は排他的で、反動的なナショナリズムへと向かう可能性がある。ハイエクの自生的秩序論は、これら二つの担い手が分裂しない社会を描いた。自由社会における伝統や慣習が、社会発展の基礎をなすと想定した。しかし伝統や慣習を担う自由保守の勢力が劣位に立たされると、かれらは自らの伝統や慣習を権威として象徴化する。自由な社会は、抽象的で暗黙知にとどまる慣習の実践によって支えられているのであるが、それらがいったん特定の仕方で権威化されると、その道徳内容は反自由の保守へと変貌する。こうした政治的メタモルフォーゼにこそ、

現代の自由の危機があるように思われる。



### 3. 自由社会の三つの原理

私は以前、拙著『自由の社会学』（NTT出版）において、「自由の三原理」論を展開したことがある。三つの原理とは、「卓越（誇り）」原理、「生成変化」原理、および「分化」原理である。これらの原理によって、自由の第三パラドックスをいかに制約することができるのか。この問題を考えてみたい。

三つの原理について簡単に説明すると、第一に、「自由の卓越（誇り）原理」とは、諸個人を自由な関係において承認することが、結果として同時に、人々のあいだに「誇り（プライド＝自尊心）」の感情を産み育てるのであり、そしてその感情が同時に、何らかの卓越した美質を育てる可能性をもっている、というものである。英語で「ディーセンシー（decency）」という言葉がある。「人並みの生活」を意味すると同時に「礼儀作法を身につけた上品な生活」をも意味する。この概念がもつ意味の広がりと同様に、人を自由な個人として承認する場合の「承認」概念にも、最低限の尊厳から最高度の卓越に至るまでの価値の連鎖があり、そこには明確な区分がない。「承認」のために最

低限の尊厳を求めることは、同時に最高の卓越を可能にする社会へとつながる。そうした意味論的なつながりを認識しつつ、社会のあり方を考えるべきだというのが「自由の卓越原理」である。

この自由の卓越原理から導かれる一つの道徳的要請は、最も虐げられた人々の「尊厳」を満たすことが、同時に「卓越」を実現するような仕方を実現するように、というものである。人は逆境において、その受苦性を高貴な魂へと陶冶していくことができる。受苦者は自身の魂を気遣い、その精神を他者に受け継いでいく。ならば実質的な自由を実現するためには、とりわけ逆境におかれた人々（マージナル・マン）の活動を支援すべきではないか。排除されがちな脆弱な生に新たな可能性を与えることが、めぐりめぐって私たちの自由を豊かなものへと育てていくと期待しうるからである。

第二の「自由の生成変化原理」とは、社会のたえざる生成変化によって、自由はその実質的な意義を実現するというものである。この原理を実現するためには、例えば、支配者が定期的に交代し、諸々の支配的な価値観や影響力が変化していくような状況がなければならない。自由とは、既成の価値観や権力の作動がもたらす理不尽な権力作用から逃れて、新たな価値観や権力の作

動をもたらすことである。あるいは自由とは、人々の関係を固定せず、また、人々の関係を断絶や無関心から救うための企てでもある。無関心が蔓延する社会においては、人々は自身を生成変化させていくことが少ない。自由とは、人間関係の断絶ではなく、むしろ人間関係において、たえず変化をもたらす価値である。自由とは各人が先天的にもって生まれた資質ではない。後天的に獲得した財産でもない。自由とは、人々の関係のなかで生成するプロセスであり、そのプロセスのなかで、人々がたえず自己解放を遂げていくことである。

こうした「生成変化」の原理が魅力的に見えるのは、私たちが新奇なものによって、自身の生活をたえず見直したいと願うからであり、新奇性は生命の活力の源泉であるともいえる。生成変化は、私たちが実質的な自由を発見するための一つの手段である。けれども私たちは、何が実質的な自由であるのかについて、あらかじめ十分に知っているわけではない。私たちは、生成変化それ自体に価値があるとみなさなければならぬ。そうでなければ、潜在的に可能な意義深い価値を、つかみ取ることができないからである。最初にある実質的な目的（価値）を掲げてそのための最適な手段を採用するのではなく、まだ知られていないさま

ざまな目的（価値）を育み、それらが実現されるように配慮する。そのための統治術を、私は「自生化主義」と呼んでいる。「自生化主義」とは、いわば庭師が草木の手入れをするように、対象のもつ自生的な力に働きかけて、その生成を促したり条件づけたりするような統治法である。

第三の「自由の分化原理」とは、自由の実質的な意味が、分化、すなわち、分割や差異化やノイズの挿入や亀裂や複数化などに、そのまま宿るとみなす原理である。「分化」は次のような概念系列をもっている。まず分化は、「停滞した大いなるもの（画一的な支配）」からの自由を求めて、さまざまな実践を喚起する。次に分化は、支配的な権力をできるだけ分散して統治するための制度を求める。さらに分化は、分散的な統治がはらむリスクに対応するために、統治上のさまざまな知恵を生み出す。分散統治がうまくいけば、分化はさらなる分化を求めて、諸個人の内面を分化させていくだろう。終局的には、分化は「停滞した大いなるもの」を排して、圧倒的な創造を求めるだろう。このように「分化」の概念は、非創造的な画一的社会への批判から始まり、創造的な非画一性に至るまでの意味系列をもっている。

この「分化」原理は、先に挙げた「生成

変化」原理と似ており、いずれも新しいものへの移行を求めている。けれども「分化」の原理は、その精神において前衛的な破壊であり、それは自由のためのたんなる手段ではなく、それ自体が自由の構成的条件でもある。「生成変化」の原理は、「偶有性→変化→生成→成長→進化」という概念系列において自由を企てる。これに対して「分化」原理は、「画一的社会批判→分散統治→その補完術→創造的多様性」という概念系列において自由を企てる。

以上、自由の三つの原理について簡単に述べてきた。三つの原理とは、卓越、生成変化、および分化である。これらの原理は、自由な社会の秩序化原理を伝統や慣習に求める立場とは異なり、自由社会の自生的な生成を促す視点を提供する。自由な保守が自由の価値を見失うとき、あるいは自由の第三パラドックスが作動するとき、歯止めとなるのはこうした三つの原理ではないだろうか。第一の卓越原理が示唆するのは、白人旧中間層よりもさらに劣位に立つ社会層への政治的配慮である。しばしば移民は、アメリカの労働者の職を奪っていると疑われるが、これに対する否定的な証拠も示されている。重要な論点は、移民とその歴史に対する理解と承認であり、移民が移民として誇りを持つことができる政治でなければ

ならない。第二の生成変化原理と第三の分化原理が示唆するのは、社会を発展させるための政策であるが、現在、トランプ政権に問われているのはその内実である。

これまで共和党は、保守と革新の要請をその都度の仕方でも統合してきた。おそらくトランプ大統領にも統合のためのビジョンがあるはずである。だがそのビジョンは、はたして党内調整をうまく導き、ひいてはアメリカの発展原理となりうるのかどうか。自由の第三パラドックスは、いかにして克服しうるのか。目下問われているのは、この問題であるように思われる。

- 1) I・バーリン『自由論』小川晃一／小池銈／福田歆一／生松敬三訳、みすず書房、1977年（新装版は2000年）
- 2) E・フロム『自由からの逃走』日高六郎訳、東京創元社、1965年
- 3) 拙著『自由の論法 ポパー・ミーゼス・ハイエク』創文社、1994年

プロフィール.....  
はしもと・つとむ 1967年東京都生まれ。横浜国立大学経済学部卒業、東京大学大学院総合文化研究科学術博士号取得。現在、北海道大学大学院経済学研究科教授。専門は、社会経済学、社会哲学。著書に、『学問の技法』（ちくま新書、2013年）、『ロスト近代』（弘文堂、2012年）、『自由の社会学』（NTT出版、2010年）、『自由に生きるとはどういうことか—戦後日本社会論』（ちくま新書、2007年）、他多数。